

自由回答

大学教育の評価（Ⅰ）：プラス面での評価

- ①型にはまらない教育で、他人をみるときも自分に余裕がもてる。
- ②総合大学のなかに位置していたため、クラブ活動や講義、ゼミを通して他学部の仲間と交流をもつことができ、多角的に看護を考える素地をつくれたと思う。異なった専門分野の友人をもつことは看護を広い視野でとらえ、今後発展させていくうえでは、欠かせない宝をもつことになったと思っている。
- ③非常に自由で自主性を重んじていた。実習は少ないが、学生あたりの教官数が多く、個別に時間をかけて指導してもらえたとし、同一教官に毎日フォローしてもらえているという安心感があった。講座ごとに特色があり、いろいろな考え方や見方に接することができた。
- ④看護を専門とし、実践の経験にも富んだ教育者により基礎教育を受けたこと。専門性のなかに自律という条件があるならば、自らの専門分野の後出する者の育成は自らしなければならない。また、統合カリキュラムをめざした（未熟ではあったが）教育であった。
- ⑤臨床に出てから役に立ったのは“学び方”を教わってあったことだと思う。疑問に思ったことについて、調べ方、学習の進め方、また、資料がどこにあるのかなどを知っていたことで現場に流されずにすんだ。教官たちの大きな理想は、自分の看護の視点に大きな影響を与えた。
- ⑥看護界のリーダーとして最も活躍している教授

陣から指導を受けることができた。

- ⑦学生に対し教員数も多く（臨床実習では学生5対教官1）、さらに医者でなく看護の方たちが教授陣だったことも、看護をとらえるうえでとてもよかったと思う。
- ⑧講義をするのが医師ではないため、看護が医者とは独立したものであることをたたき込まれる。
- ⑨大卒なので、進路を変更しようと思ったときや、別の分野で進学したいときに選択肢が多くなるのはメリットだと思う。
- ⑩一貫した理念のなかでたたき込まれた価値観は、在宅分野で本当に老人のためになるものだった。いい教育を受けたと思う。
- ⑪単科大学だったので、他の学部との交流がなかったことは残念でしたが、看護婦・保健婦としての一貫した教育が受けられた。
- ⑫大学で学んだアセスメントが社会生活にも生きている。常に問題をみつけて改善する努力ができる。自分の行動を反省することができる。看護教育は看護職としてだけでなく、人間教育としても大いに評価できる。
- ⑬4年間で、保・助・看の勉強ができるのはハードだが、視野や就職の場が広がるのでよい。
- ⑭看護婦課程と保健婦課程を同時進行で学習したので、保健婦の経験はないが、公衆衛生看護の視点をもって看護婦ができたように思う。
- ⑮看護教育は、従来の即労働力としての教育よりも、人間学をふまえたうえでしっかりと看護観をもった看護職の育成に力を注ぐことが、看護のレベルアップとともに社会的地位の向上につ

ながってくるものだと思う。

- ⑩ 3 K, 7 K と世間で騒がれているため、「働いてやっている」「Care をしてやっている」という考え方が当たり前になっているなかで、「Care をさせていただいている」「自分たちが専門職として生かされている」という考え方を在学中に教えられたのはよかったと思う。
- ⑪ 医学部と合同で行うアゼンブリー活動により、チームワークの大切さやつくり方など、学ぶものが多かった。
- ⑫ 即実践には役立たなかったが、総合的・継続的・効果的实践を推進する力をもてた。やめない看護職になれたこと。
- ⑬ 看護の現象、看護界や社会の動向を広い視野でとらえることができ、またそれらを変えていけるのではないかという気持ちになれるような基礎づくりができたように思う。
- ⑭ これから大いに必要であろう精神看護の教育をきちんと受けられた。
- ⑮ 看護過程をじっくり学ぶのは学生のうちしかないと思っている。実習にくる高等看護学校の学生をみると、卒業すぐ実践になるような内容の実習をかわいそうに思う。准看学生の実習はもっとひどい。4年間大学にいて、私は高看では十分学べないことを学んでよかったと思っている。
- ⑯ 私自身の経験からは、看護婦の学歴と仕事ができるかどうかはさほど関係がないように思う。しかし、いまの看護婦問題、これから看護はどうあるべきかということ、社会的に恥ずかしくない程度に論じることができるのは大学教育の利点だと思う。物事を理論的に考えたり、目に見えないものに価値をおけるように考えることができる（もちろん、大学を卒業しなくても、

身につけられる人も多くいると思う) のは、高等教育の特徴だと思う。

- ⑰ 人間を管理するのではなく、みつめて援助するのが看護だという、当たり前のことが教育の根底にあったように思う。社会に出て、患者をあまりにも管理しようとする看護婦が多いので驚いた。
- ⑱ 教授の言葉で、「あなたは看護以外の分野に羽ばたいてもいい、物理学者になっても、芸術家になってもいい。看護学を基盤にしていろいろな分野で活躍してほしい」とあったことが忘れられない。看護学のすばらしさも学んだが、「看護学の限界」を学んだことで、より学問を追求していこうという姿勢が備わったように思う。
- ⑲ “戴帽式”や“献身的看護”とは無関係だったので、看護婦養成の教育というよりは、学問として「看護学」をとらえることができた。
- ⑳ 私がもし専門学校に行っていたら、精神科の病院で働くことはなかっただろう。

大学教育の評価(Ⅱ): マイナス面の指摘

- ① 医学部の教師は卒業後の研修医にも教育し、自ら手術しているが、看護学部の教師は全く実践をしなくなり、臨床能力に疑問を感じる。
- ② 大学の教育担当者は研究者が多いが、もう少し臨床をふまえたうえでの教育をしてほしかった。
- ③ 楽しい思い出などにひとつなかった厳しいだけの4年間だったが、臨床に入ってみるとあまり勉強したことなど役立たなかったと思う。大学では「看護とは」ということばかりで、実際の臨床ではもっともっと違うことを要求された。頭でっかちの教育より、もっと臨床で役立つことをどんどん取り入れたほうがよいと思う。

- ④どうしても看護中心の集中的・特殊的な教育と
なってしまうため、“詰め込み教育”的な面が
多く、つらかった。もっと一般教養も余裕をも
った状態で学びたかった。単科大学であると、
視野も狭く世間一般的なものに触れにくいので、
人を看していく点でデメリットがあると思う。
- ⑤テキストに沿って進められたカリキュラムをこ
なすのに精一杯であったし、そのテキストは現
状の医療レベルにはほど遠い古典であって、実
務には役立たない。
- ⑥私立にありがちな偏った生活指導が行われるこ
とが多い（制服がある、交通事故を起こすと退
学など）。国家試験を意識しすぎた試験を行う。
専門学校とほとんど変わらないような感じを受
けた。
- ⑦大学教育であることの長所をもっと強調すべき。
いまのままでは看護婦学校3年プラス保健婦学
校1年＝4年＝大学という感じ。形だけ、学歴
だけでないなにかを打ち出していくべき。
- ⑧大学といってもほとんど高校のようで、選択で
きる科目が少なく受け身的であり、先生も英語
直訳の授業など、あまり興味のもてるものでは
なく、働き出してからの方が看護に興味をも
てるようになった。大学出身といっても学歴だ
けではないかと思う。
- ⑨看護の理想ばかり学んで卒業したが、社会では
「看護とは」などといった悠長な問題に着目し
ているより、1秒でも早く採血のできる看護婦
を求めているようだ。
- ⑩特に大卒だからという差はよくわからない。だ
が、私も友人も含めてだが、“大卒”の問題では
ないと思う。学校を大学という名前に換えただ
けだったら専門学校と変わらない。なにを、ど
のように学ばせるか、が問題ではないだろうか。
- ⑪講師や助教授の能力が低かったと思われる。
- ⑫4年もかけて看護問題がどうのこうの、優先順
位はどうのこうの、ということをだらだらとや
る教育内容は、はっきりいって私は怒りを覚え
ました。そんなもの、ある程度学んであとは実
践のなかで自分で考え、身につけていけばいい
ことです。大学側としては看護技術は病院に出
てからゆっくり身につければよいという考え方
だと思いますが、それじゃあ、あの4年間で学
んだ“理論”というのはそんなにも意義深く、
興味深い内容だったのでしょうか？ 否
です。私はもっと実習を増やして、それと並行
して理論も身につけていくべきだと思います。
学生が立てた看護活動に対して、まるで重箱の
隅をつつくように check を入れる大学の指導
についてはもうこりごりです。
- ⑬教養課程約1.5年、専門約2.5年では、専門教育
期間が短すぎて中途半端。もっと基礎医学を学
ぶ時間（単位）、実習時間を増やしてほしい。
そのためには4年でなく、医学部のように6年
制でもよいのではないか。特に私のように4年
間で助産コースも取った者にとっては、4年間
では全く足りない。卒論の研究時間も短すぎる。

大学教育の評価（Ⅲ）：他の課程との比較

- ①大学では各自が自分で考えられるようなかかわ
り方をしていた。いま教員として専門学
校に勤めているが、ここではすべてを細かく決
められ、How-to教育が行われている。
- ②短大での教育は、やはり指定規則から影響を受
けるのが大きく、なんのために看護をするのか
まで考えるカリキュラムではなかった。大学で
はカリキュラムのなかに看護に対する理念が反
映されており、学んでいて納得のいくものであ

った。

- ③短大卒業後、大学に編入しました。短大の教育とは理論的な部分で違っており、それぞれが理論をもとにして教育内容を組み立てていることによって、考え方を育てていくことができると思う。自分から学んでいくという大学教育の姿勢がよい点だと思う。また、指導者としての先生方のレベルの差は相当にあると思う、大学教育を受けたことを今後の活動のなかで生かしていきたいと思っている。
- ④私の場合は編入学なので、4年間を通しての学部学生の教育ではない。看護専門学校ときは、特に実習時間が多かったが、まさに実習場に放り出される形で、教員のかかわりがほとんどなかったし、病院の人手不足の補いのように、実習生の存在価値があるように感じたことがあった。経済的に負担が大きい、大学教育のきめ細かさ、一貫性は必要だと思う。
- ⑤市立の准看学校で働いてみて、自分の受けた教育の場がいかに恵まれていたのか痛感しました。大学では看護の本質をじっくり学べたと思いますが、准看ではそれ以前に解決したくてもできない問題が山積みです。教育したくてもできない環境にあるのです。自ら学ぶ姿勢を教えられた大学での講義や実習は、ほんとうに貴重なものでした。

受け入れ態勢（I）：採用・処遇

- ①就職活動中は、役場や総合病院で、大卒看護婦は扱いに困ると直接いわれた。
- ②いまの病院では大卒と専門学校卒との間になんの差別もないが、区別もない。現在の教育体系からいって、なにが違うのかといわれれば、ここが違う、といえるものははっきりいってない

ように思える。だから、区別さえないのも当然のように思える。

- ③大学卒としての給料などの待遇は受けていないと思われる。また、専門職としての待遇も地方の市町村では期待できない。同じ保健婦でも県の受け入れ態勢とではかなり差があることを知る。
- ④大卒者の人数が少なく、給料を学歴によって差をつけると高卒等々の卒業生としての資格をもっている人たちから反感をかいやすい。一般の会社員も学歴によって給与に差があっても認められているのに、看護の職場はその意識が低いのではないかと。
- ⑤特別問題を感じたことはない。大卒にこだわることもないと考えている。ただ、教育機関が違っていると看護への展望が大きく異なることは感じられる。
- ⑥企業に勤務してわかったことのみですが、仕事をこなす速度のみで、看護の内容までみてもらえない。患者側＝社員はほとんどが大卒なので、看護婦だとばかにされやすい。
- ⑦現在、事業所にて保健婦として産業看護を展開しているが、産業界においては大卒看護職を望んでいる企業が多くなっている。
- ⑧大卒という資格だけで高給をいただいています。まだ思うような実質が伴わないため、早く芽を出したいと思うこのごろです。
- ⑨国立病院では大卒も専門学校卒も、保健婦資格の有無にかかわらず（看護婦として）同じ処遇でしたので多少不満はありました。
- ⑩看護職も公務員と同様に、給与にも学歴の差があっても当然のはずである。わが県も専門学校卒と大卒の差が給与に還元されていないのが実情なので、大卒者が離職している、または看護に

無関係の仕事に就業していく原因の一つだと思う。

- ⑪病院によっては大卒ナースばかり集めた病棟があるようだが、看護界全体の看護の質の向上をめざすには問題があると思う。
- ⑫昇格があまりに早すぎて、無試験で今年4月より副主任となった。他の人より自分が一番戸惑いを感じる。
- ⑬大学病院に残ることを最優先で決められてしまうのは、地方出身者にとって酷だと思う。
- ⑭北海道は特に大卒者が少なく、准看が半数以上を占める病院が多いためか、大卒というだけで特異な目でみられることが多く、職探し期間中には何度となく断られたりして（技術面で劣るのではないか？とか、給料を多く出せないなど）、就職するまでに思った以上に苦勞をしました。
- ⑮看護教員（たとえば看護学校の）になろうとしても、教員資格がなくても臨床経験があれば採用になるということもあって、コスト面から考えて大卒者は教員として採用されにくい。
- ⑯一般の病院・医院は経営難の時代で、より安く看護の人材を確保できればよいと考えているため、看護の質は落とされることはあっても改善はなく、ほんとうの意味で大卒者が働ける職場はごく一部です。
- ⑰給与をとっても高看新卒者と同じであり、大学・大学院で費やした学費・時間はいったいなんだったんだろうとってしまうことがあります。勉強した分、私自身の視野が広がり、仕事自体に対する充実感・満足感がありますが、それが評価につながらないのが残念です。
- ⑱特に地方においては、大卒者の受け入れ施設は少ない。就職先も国立か数少ない自治体病院に限られてしまい、いったん退職すると再就職が

むずかしい。

受け入れ態勢（Ⅱ）：職場の雰囲気・人間関係

- ①現場は経験主義で、管理職に新大卒が「おかしい」といってもだれにも聞いてもらえない。正しいことが通らないことに疲れてしまう。同期には「もう看護はしない」という人が多数いる。
- ②一般に婦長・主任は大卒というだけで構えてしまったり、劣等感を感じてしまいやすいのだろうが、学問のおもしろさは大学で教えてもらえるが、臨床のすばらしさを教えられるのは臨床にいる自分たち先輩ナースであることに誇りをもって、堂々と指導してほしい。
- ③現在の病院はほとんどの看護婦が准看、または進学コース卒の看護婦であり、大卒どころかレギュラーコース卒の看護婦もめったにいない職場です。こういう場所では、病院も医師も、「看護婦は黙って医者のおり動け」という空気が流れており、なかなかつらいものがあります。さらに、他の看護婦は、大卒というのは先進医療について、またその介助について勉強していると思いがちで、心カテもマルクも挿管もみたことがないということが信じられないようです。おかげで大変肩身の狭い思いをしなければならず、逆説的にこの規模の病院に大卒看護婦がいないことがうなずけます。
- ④受け入れる総婦長・婦長・主任が、大学卒ということを積極的に理解せず、むしろ「たたきあげ」てきた人たちの“敵”のようにいわれることがあり、十分に力を発揮できず、むしろめだたないようにしていたころがありました。
- ⑤前任校でも現任校でも、保健室に大卒の看護婦ということで、周囲には当惑があったようですが、まわりの一般職は大卒・院卒ですから、き

ちんとした根拠をもったコミュニケーションを通し、評価してもらえたと思います。前任校ではその後、大卒で臨床経験のある看護婦（養護教諭免許のある者）が続けて採用になっています。

- ⑥手先だけの看護技術が先に身につけてしまうと、考える・工夫するという作業が欠けてしまい、あとで苦労するということが、新人をみていて毎年思っています。
- ⑦上部管理職は一応受け入れよくみえていたが、ときどき「大卒は使いものにならない」と本音をいわれて精神的にきつかった。中堅は特にひどく、給料面などなにかにつけて比較の対象とされた。
- ⑧同じ保健婦になるのに、お金がかかってもたないなどといわれたこともある。お金があるなら薬剤師もよかったのに、と。看護職が、自分自身で社会的地位を低くみているのが悲しい。
- ⑨期待の大きさと、同じ新人、もしくは先輩ナースの対応（多少冷ややかで距離がある）の差に戸惑った。どちらにしても対等には扱ってもらえない困惑が強かった。どのように私たち大卒ナースを育てていこうとしているのかもわからず、自分のもつべき役割がわからずにいて苦しい思いをした。
- ⑩現場は戸惑っている部分も多いが、最近は大卒が増加し、試みで雇用している人たちにも経験ができてきているので、よい方向に向かっているのではないか。大学院修了生の雇用のしかたについて、現在、試行錯誤中と思われる。
- ⑪病院だけでなく、防衛庁、海上保安庁、消防庁などの機関での看護系大卒者としての受け入れ態勢を考えてほしい。
- ⑫「生意気」「実務が苦手」というレッテルをはら

れている。病院に勤めれば少々（5000円くらい）給料がいいだけで、他の看護学校卒と同じ卒後教育システムにはめ込まれ、せっかくの特性が発揮できない。企業に入れば入るで、学歴がよくてもどうせ企業に入るような看護婦は楽をすればいいと思っている“OL看護婦”と思われ、アイデアを生かすことができない。つまり、専門家を育てる意志が全くない。

受け入れ態勢(Ⅲ):現場での教育のありかた

- ①配属部署での実践指導に力を入れてほしい。
- ②大卒者に対しての期待のためか、就職直後のステップ・アップが早すぎた。
- ③実力以上のことを求められ、それに応えられずにストレスを感じる人が多い。
- ④プリセプター・シップによって不安も軽減され、よかったと思う。病院側が、卒業生は0(ゼロ)から、と理解してくれているため、気負いが少なく働きやすかった。
- ⑤職場での卒後教育がしっかりと行われている病院かどうかということは、重要なポイントだと思いました。私の場合、ほとんどが個人まかせの面が多く、自分が不勉強だったせいもありますが、“学んだ”というよりは慣れで仕事をしていたという感じでした。大卒者は即戦力にはならないと思いますが、長い目でみてしっかりと教育していただければ、意欲をもって頑張っていけるのではないのでしょうか。
- ⑥大卒者が実力を発揮できる環境が少ないように思う。卒後教育のプランを看護協会で計画してほしい。
- ⑦よく技術ができないといわれるが、技術なんて1年経験すれば身につくもの。その部分だけで評価しないで長い目でみてほしい。

- ⑧さまざまな面での研修の強化と指導体制（マンツーマンの指導）が望まれると思います。しかしそれよりもむしろ、どこの職場にいても一から学び取る謙虚な姿勢が大切だと思います。
- ⑨大学卒業者は臨床経験が少ないので、どうしても他の短大・看護学校卒業者よりも動きの点で劣ってしまう。就職した時点で数週間から1か月くらい、臨床の手技的なもの、基本的なことのみ訓練する期間をつくったらどうか。また、チェックリストなどをつくって定期的に習得すべき技術のチェックをしていき、日常勤務のなかでの「知らない」「やったことがない」ことがなくなるようにするのは大事だと思う。
- ⑩保健婦についていえば、保健婦学校卒の人とは在学中の実習の内容があまりに違いすぎるため、卒後教育や新人教育がきちんとされていない職場では、最初の数年（特に1年目）は、他の保健婦の理解を得られず、立場や仕事がつらいと思ったことが何度かありました。
- ⑪看護の基礎教育をどこで受けたか（大卒かそうでないか）ばかりではなく、その個人の能力が現在どうなのをもっときちんと評価したほうがいい。基礎教育ばかりでなく、卒後教育も並行して考えていかなければ看護のレベルアップはなかなか進まないと思う。
- ⑫卒業したては、はっきりいって使いものにはありません。技術は全く未熟です。しかしそれは医者も同じこと。長い目でみてほしいと思います。ほとんどが女性のため、長い目でみていると、結婚・出産・退職となりかねないのも問題です。
- ⑬技術的にかなり大きな不安をもって卒業・就職したが、「これだけは」とたたき込まれた無菌操作、イメージトレーニング、短い実習で学ん

でレポートしたことなどで十分カバーできた（もちろん院内教育あってこそだが）。就業当初は看護学校卒の人に遅れをとっていたが、まもなく同等になれた。やったことがない、知らないということが逆に強みであり、先輩・同期にどんどん聞いて勉強できた。

- ⑭他学部の友人をみていると、会社へ入社してから何か月か研修があります。看護関係も、すぐ現場に1人で出るのではなく、研修期間を設け、先輩ナースと2人で行動するなどできるといいと思います。

受け入れ態勢（Ⅳ）：昇進、キャリアアップ、進学、その他

- ①いつかこの現実がよくなるように努力したいと思うのは、受けた教育の力だと思います。大卒者が新卒でどこかの病棟に配属されたとき、看護技術の未熟さを痛いほど思い知らされると思います。でも、努力でそれは克服できるし、後輩にも負けないでほしいと思う。大卒ということで、やや高望みの期待も寄せられます（たとえば看護研究や新人指導）が、特別な受け入れ態勢より、気長に待つて温かい目で見守ってほしいですね。
- ②少なくとも大学病院・大きな国公立病院では、看護系の研究部門の併設・充実をはかり、臨床と研究をつなぐ役割を担ってほしいと思う。
- ③在学中に教職課程を受講しなかった者が卒後教職を望む場合、看大卒であれば臨床経験3年で教職講習が受講できるようになってもいいのでは、と思います。
- ④私たちは「大卒ナースは教育者、管理者になる人」という目でよくみられました。でも、大学側は、「大卒ナースこそ臨床に残れ」とよくい

- っていました。いまの大学生をみると、ナースを軽視している学生もいるようですが、やはり大卒ナースこそ臨床へ出てほしいと思います。
- ⑤大卒だから、臨床は“イマイチ”でも管理職にせねば、と雇用者側がってしまうのがキツイ。
- ⑥大卒者を将来管理職にとか、教育者に、と特別扱いして働かせるのは、技量が伴っているか定かでないかぎり賛成できません。自分の経験から、特別扱いをされなかったことが助かりました。
- ⑦学部卒業後は1年生の看護婦として就職するのは当たり前のことである。しかし、8年目ぐらいになると、主任とか婦長という立場でなく、リーダーナース的な資格がほしいなあと考えた。内容はそれに近かったと思うが、資格とか役職がないと、動きづらいと思う。修士取得者は、なおさらなにかの役割が与えられることを望んでいる。自分は今年より修士課程に進むが、自分が生かせる道があるなら、できれば臨床に戻ることを希望している。臨床から、看護の今後の変革への力になれば、と思っている。
- ⑧看護の経験を生かして、一般の会社その他に貢献できるような、広範囲に応用のきく人材として大卒者を活用していくとよいと思う。
- ⑨卒業の時点では看護の仕事がしたいと思いましたが、保健婦の仕事にも興味はありましたが、保健婦として働くとしても看護婦としての経験があったほうがよいと考え、看護婦になりました。
- ⑩編入学により大学に進学できたので、看護大学が新設される際、編入制度をそれぞれの大学がもって、より多くの学びたい看護婦に教育を受けるチャンスを与えてほしい。
- ⑪ただ専門学校卒と大学卒を、給与体系だけで差別するのではなく、専門職としての自律と責任を負うのなら、職場も在職者の大学進学をすすめる休職制度の充実など、全体的な底上げが必要。
- ⑫大学病院での臨床経験のあと、たまたま保健婦として就業する機会があり、結果として看護の幅が広がったと思います。保健婦業務も多方面にわたるようになり、看護婦としての経験が必要な場面も多くみられるようになってきたので、よい評価を受けました。
- ⑬教育制度が複雑になっているが、それぞれの学校の教育のねらいとするところが明確にされる必要があると思う。それに伴って業務内容も区別していく必要があると思う。それぞれの学校のよい点を活用できるような業務体制づくりをする必要がある。
- ⑭いろいろな看護職の働き方ができるよう、バリエーションをつくっていく方向で進めていけるとよい。たとえばスペシャリストの道をひらくとか、開業権を広げて中間施設を増設するなど。
- ⑮継続教育を充実させ、スペシャリストや管理者をめざせるような態勢をつくってほしい。別に大卒者のみが前述の者になるべきだとは思わないが、現状では自分で学習を深めていくのは、時間的にも情報からしても不足している。
- ⑯大学院が首都圏にしかないので、進学の希望があってもかなえられない。
- ⑰私の出身大学に関していえば、早く看護学部として独立すべきである。優秀な多くの先輩が他大学に流れていくことは残念である。また、大学院も必要である。同級生の多くが看護ではなく、心理学の大学院に進学せざるを得ない状態である。
- ⑱大学を卒業したというだけでは、看護のスペシ

- ャリストとしての条件にはなり得ていないと思う。そのため現場では、大卒だろうが専門学校卒だろうが准看護婦だろうが、同じ内容の仕事をしている。看護のどの部分を専攻するかということでもう少し道がひらけると思うので、受け入れ側の問題よりも大学側がもっと取り組まなければならないと思う。
- ①⑨各大学で修士・博士が充実されてきているが、離職して学生になるのは経済的にもむずかしく（保健婦の場合は公務員であるため、同じ自治体への勤務ができにくい、年齢制限があるなど、再就職の面でも困難）、進学の手助けになっていると思う。社会人入学制度（職場在籍のままの進学）をできるだけ多くの病院・自治体などに導入してほしい。
- ②⑩研究や教育の場だけでなく、地域で草の根的に活動していく大卒者も必要だと思う。一個人の力には限界もあるとは思いますが、経験や技術だけではない看護を模索しようとすることに理解を示して下さる中小規模病院の経営者が増えることを期待したい。
- ③⑪卒業後、働きながらでも学べる夜間大学院を、昼間の大学院とあわせて増設して行ってほしい。
- ④⑫社会人入学制度（大学院）ができ、今後希望した人がいた場合に、より多くの職場で活用できるよう配慮していただけたらうれしいと思う。
- ⑤⑬都心に就職していればさまざまな情報が入り、自分にあった道を探していけるが、地方に就職してしまうと情報も少なく、退職してしまうと（たとえば就学のため）再就職がむずかしい。受け入れてくれる施設もほとんどない。地方では、一度退職して再度勉強したいと思っても、今後のことを考えると非常にむずかしいと思わ
- れる。
- ⑥⑭研修などもさることながら、卒後教育（学部などで行うもの）が受けられるような状況整備が必要。現在の環境では仕事をやめて学校へ行かねばならない職場がほとんどである。看護学の教育者を育成するためには避けて通れない課題であると思う。
- ⑦⑮あらためて大学院にというのは現実的にはなかなかむずかしいので、各教育機関で開放講座のような短期のものを増やしてほしい。
- ⑧⑯今後働きながら博士課程に進学したいと考えているが、職場の上司の理解が不十分である。看護界の諸先輩方の意識変革を切望する。
- ⑨⑰これからは女性のみでなく、男性も地域において保健婦（？）として活躍していく時代になってくると思います。その点について看護制度の見直しをお願いします。
- ⑩⑱いま離職し子育て中ですが、ナースバンクに登録しており、「パートでもよいから勤めて」という電話をいただくことがあります。保健婦へのニーズの高さを感じています。
- ⑪⑲なにをやりたいか、意見をもつ卒業生が増えている。それは新しいシステムを開発する芽となるものであることもある。若者の意見を組織のトップがどの程度聞く耳をもつか、が課題である。一番困るのは行政や看護協会のトップと自分のいるところの接点が全く具体的にないことである。開いてみたらいつの間にかこんなことが決まっていたなんていうのが多すぎる。看護協会も、大変であっても月1回は会員全員に動きの詳細を伝えたり、どんどんアンケートを取り、末端の意見を反映してほしい。